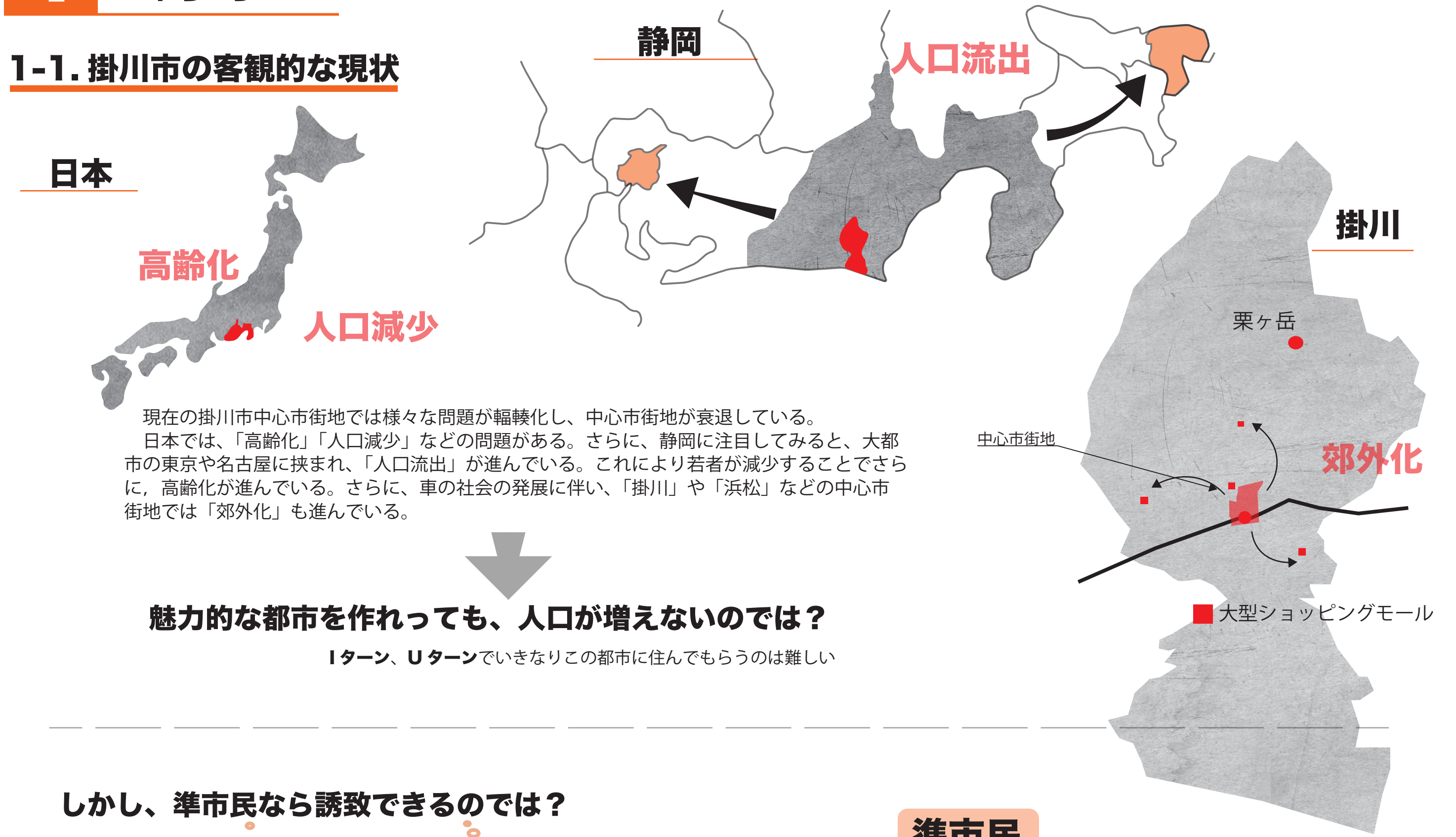


Floing city ～らせん的成長モデルの在り方～

1 背景

1-1. 掛川市の客観的な現状



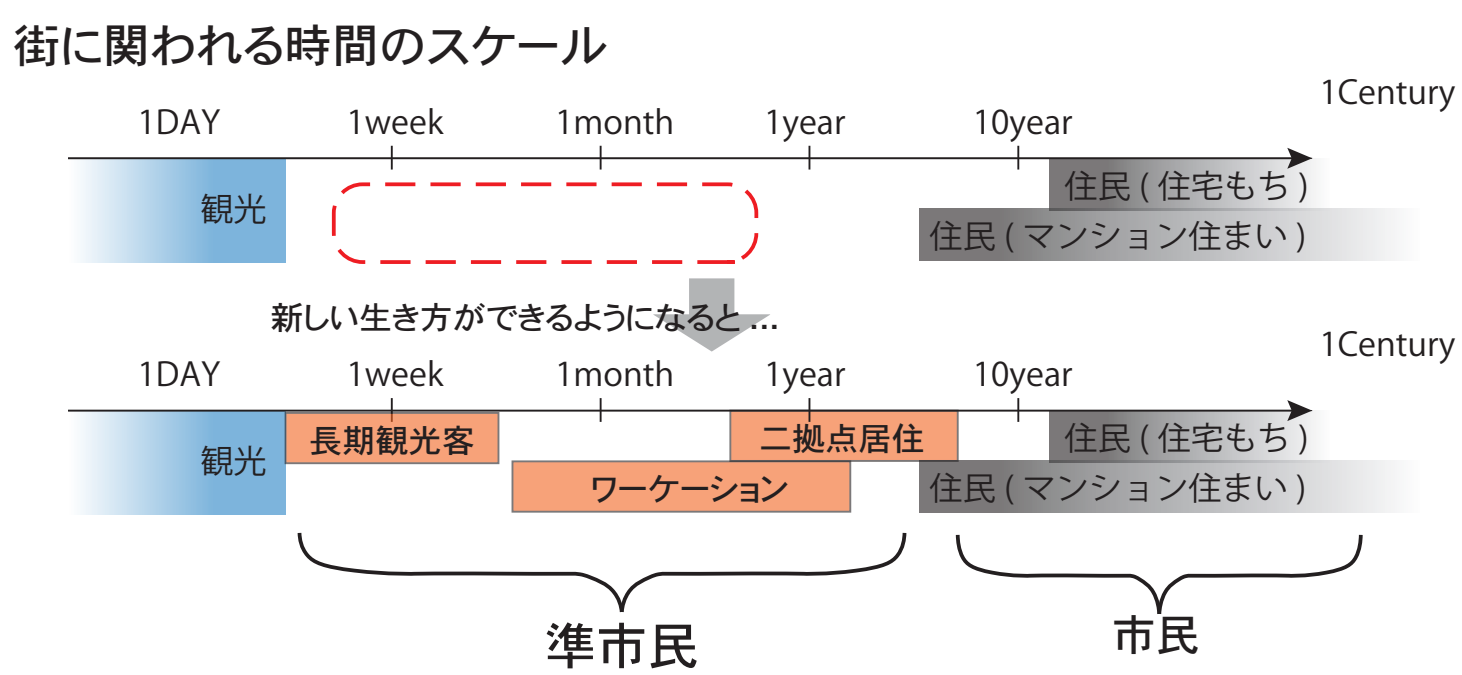
why-1：地理的要因

都心に近く自然豊かで暖かい

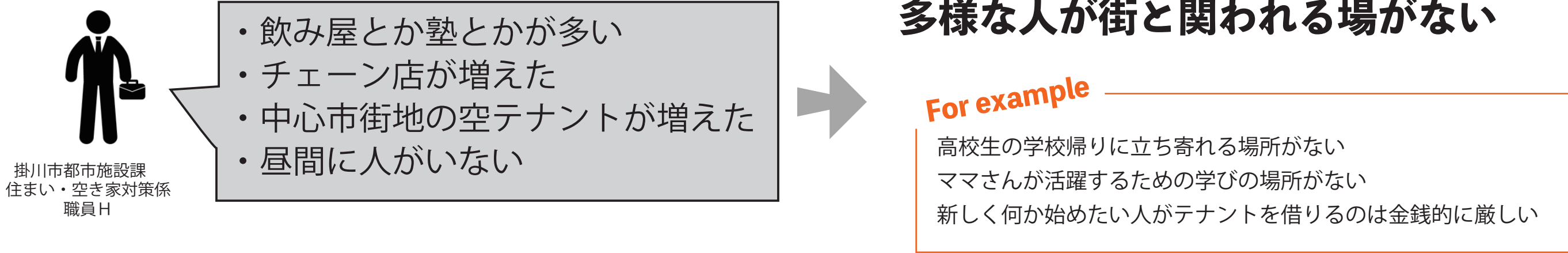
- POINT1 交通の便がいい (新幹線がとまる)
- POINT2 気候的に恵まれている (温暖な気候+日照時間=避寒地) 「別荘地」としても多く利用されている
- POINT3 自然が豊か (建物が低層+自然に近い) 栗ヶ岳 (初心者でも上りやすい登山)

why-2：時代的要因

コロナによる新しい働き方によって



1-2. ヒアリング調査



2 提案

準市民が誘致しながら、今まで関わって来なかった市民が関われる「場」を作る

8つの敷地 → 多様な人が利用できる場
歩道化した道 → 多様な人が交わる場

らせん的成長モデルとは？

現在の掛川市では、居酒屋が非常に多く、夜の街として「滞留」している。賃料が高く、売上が低いテナントが入りにくいことが一つの要因である。一方、これまでの成長モデルは、「直線」的である。街の成長に応じて、街と関わっていく人が変わっていく。一見、聞こえはいいが徐々に地価が向上し、新規参入が難しくなっていく。そこで、「らせん」的にこれまでの活動が積み重なるように成長していければ、多様な人が街と関わるることができる。本設計では、多様な人が関わるために、8つの敷地を設計し、そこでの活動を繋げ、多様な人が交流するために道空間を歩道化する。

